

英語科教育課程の編成について

1. 教育課程編成上の基本方針

- ① これまでの宜野湾市小学校英語教育課程特例校事業としての方針を踏まえ、関係法令や学習指導要領、本県・本市教育委員会の施策の趣旨と内容及び学校経営方針に基づいて編成する。
- ② 学校教育目標の達成を目指し、地域や学校の実態及び心身の発達段階と特性を十分考慮して編成する。
- ③ 知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな児童の育成が図れるよう、年間指導計画（各教科・道徳・と特別活動及び総合的な学習の時間の編成）・日課表・週時程を工夫する。
- ④ 特殊学級の教育課程は、児童の障害に応じて適切に工夫する。
- ⑤ 教科として「英語」を全学年で実施する。
1年・・・音楽・図工から各11時間、体育から12時間計34時間を英語に充てる。
2年・・・音楽・図工から各10時間、体育から15時間計35時間を英語に充てる。
3年・・・総合的な学習の時間から35時間を英語に充てる。
4年・・・総合的な学習の時間から35時間を英語に充てる。
5～6年・・・総合的な学習の時間及び外国語活動から70時間を英語に充てる。
- ⑥ 宜野湾市小学校英語教育課程特例校事業の「計画初年度の教育課程の内容」を踏まえ、目標が達成されるよう教育課程を編成する。
- ⑦ ALT, JTE を活用し、実践的コミュニケーションの基礎を培う。

	前半	後半
JTE	1年, 3年, 5年	2年, 4年, 6年
ALT	2年, 4年, 6年	1年, 3年, 5年

研究主題

積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童の育成
～ アクティブ・ラーニングをめざして～

2. 設定の理由

本市の英語教育課程特例校事業の研究をもとに、本校でも ALT・JTE の配置による TT 形式での授業を進めている。歌やリズム遊び、読み聞かせ、ゲーム、スキットなどを取り入れた身近な英語を聞いたり話したり表現したりという活動の中で、児童は楽しみながら英語に触れ、慣れ、親しんでいる。

また、外国への興味・感心も高めるため、毎年、国際理解教育とからめ、国際交流学習に取り組む活動を進める中で異文化に興味を持っている。

そこで、本年度は校内研究のテーマ「主体的な学びを育む学習指導の工夫・改善」を受けて、英語科においては積極的にコミュニケーションを図ろうとすることがアクティブ・ラーニングであると捉え、その態度の育成をめざした活動計画を模索していこうと考え、本テーマを設定した。

3. ねらい

- ① 英語に興味を持って積極的にコミュニケーションを楽しもうとする態度を育てる。
- ② 外国人との交流活動を通して、国際理解を深める。
- ③ 他国の行事を通して文化を学び、実際に体験しながら、異文化理解を深める。
- ④ 学校行事や他教科と関連づけた英語の授業を展開する。

4. 研究内容

- ① 授業の充実（ミーティングによるTTでの指導改善，ミックスカリキュラによる活動の工夫。インタビューテストによる個々の児童のスキル確認。支援の工夫。活動体系の工夫と学びあい。）
- ② 交流計画の実践法（JICA 沖縄研修員，県交流員，日本語学校等との交流計画）
- ③ アクティブ・ラーニングにつながる教材・教具の開発と工夫
(学年ごとの提示カード，会話文の整理，歌・ゲームの活用等)
- ④ 学習環境の設備（イングリッシュルーム，校舎内）
- ⑤ 英語活動の日常化を図るための工夫（放送委員における英語アナウンス，行事での英語活動，音楽朝会等での英語ソングの合唱）

5. 各学年の目標と内容

- (1) 低学年・・・(英語に触れる・慣れる) 英語のリズムに慣れる。体を動かして、伝えたい気持ちを動作として取り入れる。
 - a. 歌，リズム遊び，ゲームなどの活動を通して，英語のリズム，イントネーションを体で感じ取り，楽しく英語に触れ，親しむ。
 - b. 英語をよく聞き，大きな声でまね，意思表示がはっきりできる。
 - c. 外国のことに興味・関心をもち，進んで知ろうとする。
- (2) 中学年・・・(英語に慣れる・親しむ) 基本のアルファベットからフォニックスの導入とTPRを取り入れた場面設定により，英語の聞き取り，簡単な意思表示ができる。
 - a. 歌，リズム遊び，ゲームなどの活動を通して，英語のリズム，イントネーションを基本的な英語表現に慣れ，児童同士で英会話に親しむ。
 - b. 英語であいさつし，簡単な英語の質問に進んで答えようとする。
 - c. 聞きたいこと，言いたいことを中心に外国の人々とコミュニケーションを図ろうとする。
 - d. アルファベットやフォニックスを導入し，コンピュータ表でローマ字入力ができる。
 - e. 自国や外国の文化に対する理解を深める。
- (3) 高学年・・・(英語に親しむ・使う) フォニックスに慣れ親しみ，簡単な英語を読み，書きとる，特定の場面における伝えあいができる（自己紹介・買い物・道案内）。
 - a. 日常の生活場面や状況に応じた英語表現を聞いたり，交流活動で英語を使ったりする活動を通して，英語に親しんだり使ったりする活動を通し，英語に親しんだり使ったりする。
 - b. 相手の話す英語をわかろうとしてよく聞き，伝えたいことを自ら英語を選択しながら話す力を育む。
 - c. 生活や考え方を尊重しつつ，外国の人々とコミュニケーションを図ろうとする。
 - d. フォニックスのルールがわかり，簡単な単語や文章が読み，書こうとする姿勢が身に付く。
 - e. 異なる文化を持つ人々と協調して生きていく態度の育成。

6. 指導に関する留意点

- (1) 児童の意欲を喚起する学習指導の工夫・改善に努める。
 - ① 英語を話す外国人とのコミュニケーションを通し、英語に慣れ親しむことができるようにさせる。(ALT や JTE の活用)
 - ② 小学校英語活動と、中学校英語教育を接続するためのよりよい連携を図るべく、市教委主催「英語指導法改善研修会」で、提供される資料・情報を実践に生かせるようにする。
- (2) 国際理解教育および英語教育の充実に努める。
 - ① 各教科の目標や内容との関連をふまえた全体計画を作成し、学校の教育活動全体を通じて、国際理解教育の実践に努める。
 - ② 学年の発達段階に応じ、歌、ゲーム、簡単なあいさつやスキット、ごっこ遊び等、音声や文字を使った体験的な活動が行われるように努める。

7. 前年度研究の成果と課題

(1) 成果

- 簡単なあいさつができるようになった。
- 基本的な英語を話せるようになった。(曜日や天気など)
- 英語の歌やゲームに親しむことで、英語への興味を持つ子が増えた。
- 国際交流授業で外国との文化の違いに触れたりすることができた。
- 振り返りの場面において他教科で苦手意識をもっているような児童が積極的に参加している。
- 市が実施している英会話形成評価等の成績から、英語を聞く力が育っていることが分かる。(学校全体平均：7.0 点/全問正解 8 点中)

(2) 課題と対策

- 話をしっかりと聞くことができなかつたり、内容が理解できなかつたりして、戸惑ってしまう児童がいる。
- 聞き取りはよくなっているが個人の定着に差があるので、今後、話す活動を多く取り入れたい。
- 英語ルームでインターネットが使えるような環境が欲しい。
- 6年生は、小中連携の意味でアルファベットの練習も行い、中学校英語へのスムーズな移行を図りたい。